

Q：今日の坐禅指導で知識を離れるということを仰っていたと思うのですが、住職が考える知識とは、何でしょうか？

A：例えばですけども、もし、わたくしがその質問にお答えしたとしますね。その質問の答えをあなたが覚えたら、それも知識です、し、あるいは、坐禅のときはこういう姿勢をしたらよろしい、ということをご皆さんにお伝えしていますが、それも知識です。

あるいは、今日坐禅をしていて、居心地が良かったときもあれば、居心地が悪かったときも、多分おありでしたね。居心地がいい体験を何度かすると、こういうふうにしたら居心地が良くなるんじゃないかな、って心が先読みしたりもしますね。あるいは、反対にこういうふうになると、ここから調子が悪くなっていくんじゃないかな、と恐れたりしますね。こうやって、一方で期待したり、一方で恐れりする背景にある、これも知識です。

自分の体験をもとに、こうやったらこうなるだろう、とか反対に、こうやったらこのように陥るだろう、とか。というようなことの、共通点というのは、知識とは過去に関わっている、ということです。

純粋な知識っていうのは、文字通り、本で読んだり、人から教わったりしたようなことですけど、私の言いたい意味の知識というのは、そうやって教わったものに限ったことではなくて、例えば、アスリートの方がこういうことを言っているとします、仮に。

「君たちは知識で生きてるだろうけど、僕は自分の体験から実際にこのスポーツをやって体験したことしか信じない。この体験をして、こうやったらうまくいくっていうことを体験で知ってる。それしか信じない。君たちは知識でやってるだろうけど。」

っていうときの、その自分の体験に基づいて信じてるっていう、それも知識、なんです。

それらは専らすべて過去に関わっていて、前にこうだったとか、知識の場合は、前に読んでたっていうことですけど、文字通りの知識は。もう少し広い意味合いの知識は、自分はこのように体験をした、あの体験はこういうことに基づいていて良いことが起きたとか、この体験はこういうことに基づいて悪いことが起きたとか、覚えていて、その過去に何かあった、覚えていることに基づいて、今新たに起きていることを、直接認識するのではなくて、過去の体験とか、要は「知っている」という感覚ですね。

「このことは知っている、前に体験した何かに似ている」というふうに、あるがままに認識するのではなくて、「知っている」というフィルターを通じて、こんなふうに過去を通じてみようとする、ような作用のことと、言っていると思います。

もし、知識というのをそのように定義するなら、私たちは無意識的に、知識なんてまったく興味がない

ってうそぶいている人も、限りなくみんな知識に遮蔽されていて、その遮蔽幕のせいで物事が、先入観なく、また、スーパーフレッシュに感じられなくなってしまふ、ということですね。

人間の脳みそとは、なかなか恐ろしいもので、呼吸一つとってみても、本当はもっと自由自在に、動き回る可動域を持っているにも関わらず、なんとなく、自分の瞑想のときの息の可動域はこんなものかなくて、思い込みを持って観ていたら、思い込みを持って当てはめてるつもりじゃないはずなのに、その思い込みに基づいて、呼吸が振る舞ったりするので、それをあるがままに観ているつもりでいたりするんですが、つもりでいるだけで、いつの間にか知識に汚染されて、物事に制約をかけている、というようなことが起きているんですね。

それは、瞑想の体験を重ねれば重ねるほど、勝手に知識っていうのは積み重なってきますし、ましてや勉強すれば、理論を勉強したりすれば、文字通りの知識がいっぱいついてきますし、文字通りの知識を洗い流していても、そうやって、体験に基づく知識っていうのが、どんどんどんどん積み重なってきて、それは一見すると、その知識に基づいて物事が、ある種の制約を受けて、いい方に転がるように見えることも確かに、あるんですけども、物事をありのままに観て、そのありのままに観る力によって、物事が観られることによって、自然に変容してくるっていう、智慧の最も強力な働きを引き出してあげる、という点で言うと、それを、その智慧の生き活きとした働きを、圧迫して窒息死させるような作用を持っています。ですから、知識にも、下等な知識と上等な知識がありまして、なるべく皆さんにお伝えするのは、せめて、下等な知識よりは上等な知識をと、生き活きとした知識をと、思っていますし、もしくは、最上の知識っていうのも、知識が消滅しかかるギリギリのところで、知識が自己消滅していくのを助けるような特殊な知識、だとか、にしようと、努めては、いるつもりなんですけど、それも、けど、暗記して、知識として覚えて蓄積して、使い回しているうちに、どんどんどんどん錆びていきますし、腐っていきますし、結局それらは、どれだけ上等な知識であっても、智慧そのものを、圧迫させて窒息死させるような性質を持っているんですね。

ですから、かといって、それらの上等な知識は、うまく利用してあげないと、それらが知識だから嫌だと言って、蹴り飛ばしたり、嫌悪したり、始めると、「好まない嫌わない」という平静さが、失われてしまつて、「知識を嫌う」という中にはまってしまうなら、また道を誤ってしまうから、難しいのですが、バランス感覚っていうのは、そうやって、頭の中に生じてきて、定着しようとするあらゆる知識について、

これはただの知識であって、また、こういう観点から言ってもいいです。

智慧というのは、究極、頭によって作られていない領域の働きのことなのです。作られる前のところに、戻っているということ。頭は分解して分別して、整理したり、区別したり、したがるんですけど、そして合成したり、分解したり、そうやって、頭によって、いろんなものは作り上げられていくんですが、知識ってというのは、もれなくそのように、頭によって作られた、という性質を持っています。また過去の何かに基づいている、という性質も持っています。

智慧の特徴というのは、作られていない。頭によって、いろんなものが分解されたり合成されたり、作られて製造されているんですが、その製造される以前の、心の領域の働きが、智慧です。

そしてまた、過去に知識が依存している、という点で言えば、智慧の働きというのは、絶えず今でしかなくて、また、「今」っていう言葉も知識ですから、概念ですから、智慧そのものの中には、本当は今、便宜上、「今」って説明してるだけで知識で、その説明すら寄せつけないような、知識以前、なんですね、智慧というのは、ですから、今という概念もありませんし過去もありませんし現在もありませんし、端的に永遠の今であって、智慧の中には時間がないと、言えます。ただ、ものすごく活発に働いて、すべてを照らして知っている、というだけ、です。

概念によって、「分かる」ということをするのはなくて、ただ直接、ズバリ「知っている」という……。その智慧が働くために、知識が邪魔をせずに、協力してくれるようにする術は何なのか、というと、「ああ、これは知識に過ぎないな、頭が作ったものだなあ。合成したり分解したりして、仮に作った幻のようなものだな、だから執着するに値しないな」という考えも知識なんですよ。「執着するに値しないな、というその知識も、今頭が作ってるものだから、執着するに値しないなあ」という具合に、その知識に執着せずに、その知識を惚れ惚れせずに……。惚れ惚れしちゃうんです、みんな。特にいい知識がわいてくると、「あ、いい感じだ。自分ステキなこと考えてるな。ステキな自分、いい考え。僕の考えすばらしいな」と抱きしめてるんですけど、その抱きしめるのをやめてしまって、「ああ、それはでも、どんなにいい知識だろうと、頭が合成して作り上げている、智慧を圧迫死させるようなものに過ぎない、あまり意味はないなあ。かといって、嫌うほどの価値もない、夢中になる意味もないし、嫌う意味もない、そういう知識が生じてるんだなあ」と、ふわって観ていてあげたら、その観ている、まなざしそのものの中に、心が立ち返っていったなら、そこに智慧が働いています。答えになったかしら。

Q：漠然と分かったんですけれども、実生活において、カテゴリーを作っていないと、うまくいかないと、思い込んでいるのか、

A：ふんふん。

Q：分類作業が絶対的に必要だっていう、知識、過去の体験に基づいているのかっていうところが、働きまくって……。、

A：まくってるんですね。分類作業と言うのは、例えば、危険な人とか、役に立つ人とか、優しい人っていうカテゴリーとか、意地悪そうな人っていうカテゴリーとか、味方とか敵とか？

Q：人間だとそうなるし、お掃除するときとか、お食事のときとかでも、分類作業というのは、バンバン働いてまして、そのときの……。、

A：掃除をするときに分類作業が必要ってというのがいまいち分からないんですけど、どういうのが必要なのですか？

Q：ここは上なので先に片づけます。上、中間、最後みたいな。分類作業ってというのは、おそらく経験に基づいて、埃は上からっていう、

A：ああ、なるほど確かに。

Q：それが派生して、仕事から人間関係まで広がって、カテゴリーこそすべてみたいな部分があったんですけど、

A：ふーん。

Q：その、住職の今仰ってたことをきいて、智慧はすごく大切だなって思ったんですけども、働かせてみたいとは思いつつも、

A：思いつつも、

Q：実生活のカテゴライズを、俯瞰で見るとことはなかなか難しそうだと思います、

A：あー、なるほど。そのカテゴライズというのを、止めようとするわけでもなく、また……。、それから脱出しようとするわけでもなくて、そうですね。俯瞰するのは難しいと仰いましたので、これが、そのあとまた俯瞰するようなことを言ってアドバイスになるかどうか、分からないんですけど、「あ、カテゴライズしてるんだな、そっか」というくらいに、観ておいてやる、という感覚です。そのカテゴライズを特に否定するでもなく、そうやって観ていてやれば、いくつかのカテゴリー分けに関しては、役に立っていると実感できるかもしれませんが、いくつかのカテゴリー分けに関しては、有害な働きをしているということもだんだん実感、されてくるかもしれません。

そうしたら、またカテゴリー分けへの執着を手放し

たら大変なことになるんじゃないだろうか、という心配事もむしろ、カテゴリー分けのせいで、弊害が生じているということが分かってくると、もう少し、リラックスして手を放しやすくなるかもしれません。とは言え、もちろんわたくしだって、カテゴリー分けを頭が勝手にしているんですよ。それが、人によって多いか少ないか、という違いであったり、また今の文脈で大切なのは、そうやってカテゴリー分けして知識が働いていることに執着しているか、執着せずに、「そういう知識が働いてるんだな」って、その外に出ているか、というようなことです。

ある意味、知識に執着し過ぎますと、知識の奴隷になるといえるか、知識に使われるような感じになってしまいます。その知識の範囲でしか動けなくなる、と言いますか。「知識が生じてるんだな」というふうに、知識の外から、覗いてあげるような、まなざしが育ってきますなら、そのとき、知識を使うような、意識のほうが、知識より上に立つような感じになります。

それは、今の、知識のことに限ったことではなくて、何が対象でも、同じことなんですけれど、例えば、面接を受けているときに、「どうしても受かりたい」「もし落とされたら自分は路頭に迷う」とか思って、必死になっている場合、面接官のほうが立場が上になって、そして面接官ないし仕事って考えてもいいですけど、仕事が主人になって、その仕事よりも意識の活動のほうが小さいような感じになって、それに押し潰されているような、意識の活動レベルになります。

ところが、そもそも、「その仕事が別に得られなくてもいいや」と、もともとと思っていたら、仕事とか面接官よりもこちらの意識の活動のほうが範囲が広がって、広々とした感じになっていて、余裕があります。また、もしくは、仮にその仕事がほしいと思っても、「その仕事がほしいと思ってるんだな」とただ覗いてあげて、その「ほしい」という気持ちにベトッと入り込んでしまっていなければ、「あ、ほしいと思ってるんだ、そうなんだ」とただ覗いているだけ、であれば、「ほしい」という感情に同化していません。

同化していなければ結局のところ、その仕事と意識の範囲がどちらが広いかというと、意識の範囲のほうが広いのです。

何事が対象でも同じことが言えますが、意識の範囲のほうが、それがほしくなる気持ちにとらわれたり、嫌だという気持ちにとらわれたりして、夢中になっているなら、その意識の対象よりも意識のほうが小さく狭くなって、押し潰されるような感じになるんですけれども、執着を離れていけば、意識の範囲が広がって、そのことに関して余裕ができて、俯瞰

的に見るることができる、ということが、可能になるわけですし、それは、知識についても同じことが言えます。

知識とか、より細かく言って、仰られたようなカテゴリー分けについても、同じようなことが言えます。ですから、「どんなカテゴリー分けをしているのかなあ」って、ときに自覚してみても、自覚した結果、「だからこうすべき、ああすべき」っていうのを付け加える必要は何もないので、ただ自覚して、「ああ、こういうカテゴリー分けがクセになっているんだねー」って覗いてあげる練習は、有意義なんじゃないかな、と思いますよ。

Q：最後に一つ、いいですか？

A：はい、どうぞ。

Q：知識は足かせになるんですか？

A：足かせにもなり得ますし、手助けにもなり得ます。執着すれば、足かせになります。それがただの知識に過ぎず、「あんた、ただの知識やん、頭によって作られただけの幻やん。あんた、ただの幻やのに、そんな大したことないやん」という感じに扱ってあげられただけ、つまり知識に使われる感じにならずに、知識を自在に操れるようになります。「あんた幻やん、どうでもええやん。どうでもええから、今あんた、この仕事すべきやから、この知識はこの仕事してや。こっちの知識はこっちの仕事してや」っていう感じなんです。そうじゃなくて知識に夢中になると、その知識が幅を利かせて、意識にいろいろ命令してくるような感じになる、というような、それを、知識への執着を外して行って、幻だってことが分かってくれば分かってくるほど、頭が作ってる、作られたもの、であって本物ではない。

智慧は本物です。なぜなら、頭によって作られる前のところ、もともとあるものだからです。

脳が作った幻に過ぎず、「ああ、じゃあどうでもいいやん」って分かってたら、どうでもいいので、好きなように配置替えができる、ようになるという感じにして、「どうでもいいからなくなってしまう」とか「足かせだからそれを破壊すべきだ」とか、そういうことではないのです。もし知識を破壊してしまったら廃人になってしまいます、本当に。植物人間になってしまいます。破壊すべきだと言っている、のではなくて、それに引きずり回されるのを卒業して、超越する道、というのをお勧めしているのです、はい。

Q：すっきりしました。

A：はい。多分、分かっていただけかなと思いました。

Q：ありがとうございました。